巻頭言

年 頭 所 感

安 田 幾 久 男*
YASUDA Kikuo*

Preface

昭和36年の新年を迎えるに当って所懐の一端を申しのべて御挨拶に代えたいと存じます。

ここ数年来の日本経済はその伸展度は極めて著しく、特に1950年代の終りから新時代の開幕に当る意義ある昨年にかけて、世界経済の先頭にあるかのような好況を維持でき、その中であって、とりわけわが軽金属工業は発展工業の1つに数えられる程に各方面から注目されるに至りましたことは、誠に感激に堪えません。

10数年前の状態當時を回想しますとき、軽金属工業、就中アルミニウムの生産が10万トンになるということは、夢のようなことであったということ、私1人の感懐のみではないと思います。それが昨年第2次大戦中の最高生産量を突破し、アルミニウム地金において13万トン、加工製品合計において20万トンの生産を見るに至り、またマグネシウム工業におきましてアルミニウムに遅れること10年にして生産再開を見ましたにもかかわらず新金属として重要な地位を占め、その基礎は益々かたくなりつつありまして感無量なものがあります。

ここに至りましたのはなんといいましても、当業界の生産技術の向上を中心とする企業の合理化の遂行と所謂産学協同の各般の諸研究、辛ばう強い用途開拓の成果と信じて止まないのであります。例えば、船舶へのアルミニウムの利用は、既に世界的水準に達し、建築においても最近のアルミニウムサッシの進出、内外装材の普及、あるいは車輛の軽金属利用による軽量化、最後に典型的な構造物とも目される橋梁までもが、全軽金属製のものが製作されるようになり、これらのための製錬ならびに加工設備あるいは技術水準も面目を一新するようになりましたのも、いづれも零点から出発した過去10年以上に亘るこれらの努力から生れたものであります。

しかしながら、一方においてわが軽金属工業はこれらの努力にもかかわらず、戦後15年にして始めて戦時中の最高生産を突破したに過ぎないのであって、政府ならびに業界におきましても、それぞれ長期需要の見通しをたてて、相当な伸張度を見込んでいるようではありますが、その達成は必ずしも容易なことではないということを肝銘しなければならないと思うのであります。

御承知のように長期的観点からこれまでアルミニウムの設備拡充が主要国において続けられていたのではありますが、昨年初頭来アメリカにおいてはその経済活動は鈍化の傾向にあって、この結果アルミニウムの過剰傾向さえ伝えられているのでありまして、貿易の自由化が本年から実施されるに当って生産資金ならびに用途などの諸条件が必ずしも満足されていないわがアルミニウム工業にとってはまさに頂門の一針ともいうべく、製錬、加工共に海外のアルミニウム工業国と競争して行くことは実に容易なことではないのでありまして、増産、設備の拡充の前に先づ腰を落着けた量より質への努力こそが従前に増して重要なことと思います。

次に技術の進歩はいづれの産業界でも著しく、いろいろな特色ある材料が生れ来て、これらとの競争がはげしくなることは当然予想されるのでありますが、ただ単に競争というのではなく、これを利用した軽金属との調和を図って相共に発展して行きたいと念願するのであります。

要するに本年はわが軽金属工業にとって今後円満に発展するか否かの極めて重要な局面に立っているというような年でありますので、私共は同業界の強い協力と関連産業界との緊密な提携によってその局面に対処し、来るべき10年間の発展を期する所存であります。

* 軽金属協会会長 President, The Light Metals Society